「働き、体験してきたこと」（抜粋・一部編集）　奥泉　勝雄

昭和初期　10代での造材とヤマゴ、馬追の仕事

常呂町高齢者教室『平成元年度オホーツク大学文集　トーコロ』掲載

私は農家に生まれ、尋常小学校４～５年生の頃から農作業の作付けをするため、両親の手伝いとして働いた。馬で畑を耕し、農作物の草取り、収穫物の終わるまで働いたものです。日曜日はもちろんのこと、学校を休んでまでも親の手助けをしたことも数え切れないほどです。

私が尋常小学校を卒業したのは大正15年３月21日でした。学校を卒業した後は、父親と薪切りです。３月頃の雪解け時期には、朝は一面に堅雪になり、その堅雪を利用して朝早く、まだ薄暗いうちから木で作ったそりで両親とともに山から薪を運び（雪が解けてくると蒔き運びができなくなります）、鋸で薪切りを手伝い、子どもでありながらあまり遊ぶことはありませんでした。

当時、私の家での作物は水田が主流でありました。大正15年は冷害のため大凶作であり、水稲は皆無でありました。そのため、他の労働で収入を得なければ生活が困窮するため、父と２人で昔からの造林業で働くことにしました。ちょうどその秋に、家の裏の沢で須佐幸一という方が造材山を始めました。私は15才でありましたが、その造材山で父と２人で働き、馬で木材を運搬しました。しかし、馬追をやる気になったが大勢の馬追さんがおり、私のような子どもが馬追の仲間になり、馬追をするということはまったく自信がありませんでした。何せ朝早くから晩遅くまで働きましたが、朝は寒く、手は冷たい。泣くに泣けず我慢の連続でした。しかし、私は意志の強い方であったので、働くことは我慢しながらも雪解けの仕事が終わる最後まで働きました。

やがて農繁期に入り、春の馬耕期にはほとんど私が馬の仕事をしました。春の蒔き付けをして、秋の収穫が終わるまでは両親に負けないほど働きました。

その内に正月が来て年が明け、私も16才になりました。15才の年に一冬馬追をした経験を活かしてまた造材山に馬で木材運搬をやることにしました。１月末に幌内沢で元常呂村市街川向かいに中村湧助さんという有名な造材業者がいて、その方の造材場に山飯場があり、その飯場付きで働くことにして色々準備をしていた。（略）

山飯場の人は朝の出かけが早いものです。まだ薄暗い内から馬に道具を付け、木材現場へと向かい、大勢の馬追さんがいる中で私のような子どもの馬追は何かばかにでもされるような気がして自信がなくなってきました。山では丸太積み込み人夫がいて、丸太を積んでくれるのですが、ベテランの馬追さんは石数の上がる良い丸太を積んでいき、私が積む時には残木の石数の上がらない丸太しかないのです。それでも仕方なく初めてのことでもあり、ようやく丸太を積み、山から出かけたのです。（略）

その翌日からは他の馬追さんのやることを見習い、仕事のやり方も段々と要領良くなり、雪が解けるまで山の丸太運搬を続けて帰ったのです。でもまだ16才くらいでは子どもです。子ども心で自信を持ってもおとなと同じようには仕事はできません。

徐々に雪も消えて農耕の準備もしなければならず、その頃の私は農業については全て知っていたので、親たちと相談しながら農業仕事に入り、蒔き付け、草取り、収穫へと仕事を進めました。その年の収穫も終わり、また何か冬仕事をしなければと考えましたが、冬

仕事は一冬休んで、自宅用の仕事を父と2人で薪切りなどをしたのです。
18才の年には近くの常呂川の洪水によって河川の決壊があり、護岸工事の仕事ができ、土方（今は土建業と称しているが、昔は土方と言っていました）仕事に行き、働きました。私は子どもではありましたが、明るい性分だったので工事現場に行っても現場係の人に好かれ、労賃もおとな並みに出してくれました。
昔、護岸工事は玉石を使ったものです。その玉石が必要になれば、私は馬で各沢々で玉石を採り、集めて馬そりで工事現場まで運んだものです。柳芝なども相当使うのを運びました。私は現場頭の言うままに仕事をしたので、頭には大変に喜ばれたものです。その頃は毎年のように護岸の仕事があり、各工事現場で働きました。年令が18～19才になってからは何の仕事をしてもおとな並みにできました。
人に負けることは大嫌いな性分で、仕事ではあまり人に負けたことはありません。昔は今と違って機械化されたことはなく、何をするにも人馬です。仕事をするなら思うような仕事場で働けたものです。
また、昔は職場により通称の呼び名が土方とかヤマゴ（杣夫：そまふ　キコリのこと）、または馬追人夫といったように色々な職場がありました。私はその中で一番働いたのは1に馬追、2にキコリ、3は土方、4は人夫というような職場を長年にわたり、毎年のように農業以外の仕事をしました。
私が働いて一番思い出が残っているのはヤマゴをやっていたときのことです。杣夫（ヤマゴ）が6人おりましたが幌内沢で大木が7本ほどあり、その木の名前はワタドロという木で、その中に特に太い木がありましたがその木を切る杣夫さんがおらず、ある晩にくじ引きをすることになりました。私はその頃自分の家から通いで山に行っていたので、私のいない時にくじ引きをして、私の分は山頭が引いたとのことでした。ところがその木を切り倒すのが私に当たったというのです。私は大きな鋸を持っていたので早速その木を切り倒すことに取りかかり、山頭はカメラを持って私の切り倒すのを写真に撮りました。切り倒した材根を測ったところ2メートルあまりもありました。その木を8尺の長さで切りそろえ、その丸太を馬で下の土場まで人夫4～5人付き添って運搬しました。そしてその丸太を1丁だけトラックに積んで行き、北見駅の土場でも写真を撮ったとのことです。その木1本で総石数が百石近くもあったとのことです。山頭さんの言うことによれば、このような太い木は幌内沢では1～2番ではないかと申しておりました。（略）